

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370104855		
法人名	社会福祉法人 リデルライトホーム		
事業所名	グループホーム カムさあ		
所在地	熊本県熊本市龍田陳内3丁目37-7		
自己評価作成日	平成27年11月25日	評価結果市町村受理日	平成28年1月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php">http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成27年12月16日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当法人は社会福祉法人リデルライトホームが運営している。カムさあは、小高い山の上であり、新興住宅地でありながらも自然も豊かにあり居住場所としてはより良い環境である。室内は全てバリアフリーになっており、洋室9室の1ユニットで運営している。基本運営理念として「その人らしく」「自己決定」「自己実現」「だからから拘束されない」などを掲げ、その方らしく生きることのできる施設運営に取り組んでいる。最後までその人らしく生きることを支援しながらも、ご家族の絆を大切にすることをケア理念にしています。ご本人のペースで自分らしく暮らしていただけるよう、主治医と連携を図りながら、ご希望があれば看取り介護の実践にも取り組んでいます。地域交流にも力を注ぎながら地域の理解を深め、認知症を患っても尊厳をもった生き方を支援することができる施設運営を心掛けています。平成26年12月より認知症カフェを第2日曜日13:30~15:30開催し、地域の認知症介護相談等を実施している。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開所11年を迎え地域でのホームの存在は確固たるものとなっている。法人創設者の『慈愛の精神』は、理念に込められた入居者への尊敬と慈しみの言葉となって表現され、常に入居者が主人公であることを謳っている。認知症への理解と共存を願って発足した「介護サービス連絡会」は、ちょうど1年の節目を迎え、地域における認知症啓発の拠点としてカフェの開催や気軽に立ち寄れる相談所として期待されている。入居者や家族の大半が最終までをホームでと考えており、ここでの生活が入居者にとっては、まさに新たな人生であり、職員は家族と機会あるごとに顔を合わせて話し合い、暮らしぶりの報告や意見・要望の収集に力を注いでいる。高齢の入居者にとって大切な時間だからこそ、支援の前にはデータ取りなどの情報収集や意見交換・勉強会を開催するなど、最良の方法を見出し、職員は誇りと自信をもって対応している。今後も入居者にとって穏やかな時間を提供するホームとして新たな1年1年を重ねていきたい。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は、職員理念と運営理念に分かれており、日々、職員や入居者・ご家族が目にするよう掲示している。入居者が生活の中で自己決定できるように支援しながらも自分らしく暮らすことができるよう、理念を共有し実践できるよう努力している	法人の精神を受け継いだ運営理念と職員の果たすべき役割について掲げた職員理念は、共に人間尊重の立場に立っており、個々の入居者のこれまでを尊び、ホームにおける生活が本人の意向に一番近い形で表現できるよう、出来ることを継続し不足を補いながら実践している。この一年は地域、特に低学年の児童に向けた認知症啓発や相談窓口として力を注ぎ、地域と一体となって運営を展開している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域密着型サービスの意義を理解し、生活は施設の中だけで完結しないようには地域のお店を利用したり、地域行事に参加するなど、社会との繋がりを大切にしている。また、自治会にも加入させていただき、回覧板や掲示板を活用して地域行事を共有している	地元校区の『介護サービス連絡会』に協賛し、20業主が集まる月の定例会では、「顔の見える会議」を展開しながら地域における認知症啓発に助力している。子ども向けのサポーター養成講座や認知症カフェの開設は、小さい子どもから高齢者まで交流を通じて、認知症への正しい理解と拡充を図ることはそのまま、入居者が様々な機会に地域へ出て、社会との接点を保ちながら生活する基盤ともいえる。	今後も地域や身近な近隣住民を支える福祉サービスの拠点として、法人の協力も得ながら、活躍されることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	龍田校区の介護事業所で構成される「龍田校区介護サービス連絡会」を中心に、地域のサロンへの職員派遣や認知症カフェの実施・龍田小学校キッズサポーター養成講座への参加・龍田中学校ナイスライ受入れなど、消防訓練の際に地域消防団の方にも参加してもらい、実際に認知症方と接する機会を設け取り組んでいる。また、北区で実施している認知症サポートリーダー研修への参加等を通じ、地域の認知症理解を高める努力をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、自己評価・外部評価を配布し、職員が回答した内容や課題を項目別に報告している。また、率直なご意見をお聞きできる良い機会であると共に、ご意見をサービス向上に活かす取り組みを継続したい。	2ヶ月ごとに定例化した会議には、地域代表者や包括職員、家族などの参加により開催されている。地域を巻き込んだ大掛かりな防災訓練を会議と並行して行い、現状を見てもらうことで様々な意見や気づきを得ている。会議では外部評価の有る無しに関わらず、自身の振り返りとして、各職員が自己評価を実施し、ケア向上に繋いでおり、会議の中で紹介している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議開催の際、地域包括支援センターの職員に参加していただき、地域の課題を自治会長や民生委員の方々などと話し合いの場を設けている。また、運営に関することは、熊本区役所の担当者に確認するなど、気軽に相談している。又、介護サービス支援員の方に月1回来て頂き、サービス向上に努めている。	包括職員の運営推進会議への参加により共に地域情報を共有し、課題点の把握や検討に努めている。管理者は必要があればその都度行政に足を運び担当者と直接会話をし、ホームの事だけに留まらず、地域全体の現状を声にしながら連携を図り、より良い関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月身体拘束廃止委員会の中で、身体拘束が事業所で行われていないかお互い確認をして、法人全体で身体拘束がないケアを行っている。定例的な勉強会を行い、安全に暮らすことができる環境づくりに努め、利用者の人権に配慮したケアの実践に努める	法人全体で身体拘束廃止に向けた取り組みを実践している。会議での情報は部署ごとに更に検討し、拘束や虐待について職員はしっかりとした認識を持っている。日々、ボディチェックをする中で内出血を起こしやすい方へは、誘導の際など入居者から職員の手を握ってもらうことで、皮膚への圧迫を避けるなどケアの方法も統一している。また、言葉遣いについても「ダメ」に代わる表現方法を職員一人ひとりが探すことを課題として、スピーチロックをしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員は職員会議や研修会で虐待について学ぶ機会を定期的に設けている。日常的には、入浴時のボディチェックを行い、外傷がないか皆で確認する体制になっている。また、言葉の虐待については、職員間で注意するよう日々心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、後見制度を活用されている方がおられる。認知症と権利擁護は非常に密接な関わりがあるため、ご入居の認知症の段階に合わせ、パンフレット等を用いながら説明する機会を設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に、十分な説明を行うように努力しているが、一度に多くのことを説明させていただくため書面に線を引いたり、料金についても別紙を活用しご納得いただけるように説明している。契約後も疑問点やご不明な点がないか、お伺いするよう心がけている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者やご家族からのご要望についてはできるだけ対応するようにしている。また、運営推進会議などで話題にするようにしている。開かれた施設づくりを基本としている。今後も、継続した運営を行う。	職員は入居者と生活する中で自然に要望を聞き取り、申し送りや会議の席で共有しながら支援に反映させている。また、家族への電話や面会時には入居者の近況に触れながらホームへの意見や要望の引き出しに努めている。内容は運営推進会議や法人にも声をあげ、意見を求めながら透明性のある運営を心掛けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃から職員の意見や提案を聞くようにつとめている。職員の意見は環境次第で出なくなるので、意見を言いやすい雰囲気づくりに常に心がけている。管理者は、代表者は事業運営についていつでも意見交換できる機会を設け運営に反映させている。今後も継続させ運営を進めてゆきたい。	法人の異動などにより現在、男性職員が多く在籍するホームでは、普段から活発に意見を出し合い、ケアの質の向上や職場環境の充実に繋いでいる。入居者にとって必要な排泄用品の選択に1週間のデータを取り決定したり、「物に住所を決めよう」と、題して備品を定位置に置くことで環境整備と物の大切さをあらためて学ぶ機会としている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	やりがいや向上心を持つことができる、施設内外の研修会の他に、キャリアに合わせたキャリアアップ研修を各段階に合わせ開催している。給与については、年1回の昇給や夏季休暇・冬季休暇・年休など福利厚生 of 充実に努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修を年10回以上・その他、勤続期間に準じ初級・中級・上級職に分類し、キャリアに合わせた適正な研修内容を準備している。その他施設外研修もあり職員教育には力を注いでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービスの意義を理解し、熊本県地域密着型サービス連絡会や熊本市ブロック会・龍田校区介護サービス連絡会等に参加し、サービスの質を向上させる取り組みをしている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	最終入居が2年前ではあるが、入居初期はできるだけ安心して過ごしていただけるよう話しやすい環境をつくり、できるだけ傍で話が聞けるようにしている。ご本人の意見を尊重し、安住の場となるようこれからも努力していく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族を安心してお預けいただけるよう、不安や要望等を気軽にお話いただけるよう、より良い関係が築けるよう努力している。また、ご家族の話にも耳を傾け、その方らしい生き方ができるよう今後も務める。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	その方らしく生活していただけるよう、必要とされる支援は、他サービス利用も含め、必要とされる支援に優先順位をつけながら、実施できるように努力している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の個性や持ち得る力を発揮できるような関わり方を常に行っている。共に過ごすことで信頼関係を構築し、それぞれが生活の中に役割をもつことができる関係づくりを心掛けている。また、支援する一方ではなく心が通う関係づくりを心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人にとって家族は大切な方であることを職員は理解している。面会時は、ゆっくり過ごしていただけるよう日頃よりご家族の絆を大切にできるよう心掛けています。また、近況をご報告し、ご要望を聞きながら共に支え合う関係づくりを努力しています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	職員は、ご本人がこれまで大切にしてきた方や場所を断ち切らないことを理解している。また、大切な物や気持ちも途切れないような環境づくりをしている。ご家族・職員付き添いで馴染みにの場所に出かける支援もしている。これからも続けてゆきたい。	職員は個々の入居者の歴史を知り、入居後も出来ることでこれまでの生活の継続や趣味や特技が生かせる場を設定している。行きつけの大型商店での買い物や心の拠り所とされている教会への礼拝、家族の面会を毎日心待ちにされる方への支援など一人ひとりに必要とする内容を見出している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の関係性を理解した上で、入居者同士が関われるようにしている。席の位置や家事の内容を工夫してより良い関係が気付けるようにしている。また、職員が間に入り話題づくりにも心掛けています。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご利用が終了しても関わりを継続できるようにしている。出会えたご縁を大切にご本人やご家族の相談内容に耳を傾け、出来ることを職員で考える姿勢を継続している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の意向・希望が叶うケアの実践を行っている。一人ひとりに合わせたケアを行い、「その人らしさ」「その方のQOL」等を考えながら日々ケアを行っている。また、今後も思いやりをもったケア基本に努力してゆきたい。	日中は殆どどの入居者がリビングに集い、ソファやテーブルでゆっくり寛ぎ、職員は寄り添うように会話をしている。入居者から聞かれた声は全職員で共有し、日々の支援やプランに反映させており本人の安らぎとなるような生活を支えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	その方らしさを支援するために、これまでの生活歴やこれまでのサービス経過を理解し、その方に合った暮らし方を基本に各職員が収集した情報が活かせるよう支援に努めたい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録表を24時間表を活用していることで、食事・睡眠・排泄・余暇の過ごし方・リハビリ等を時間を軸にして記録するようにしている。3か月～6か月毎にモニタリングを実施することで、現状の把握に努めるチームケアを実践している。また、状態に合わせて記録用紙は個人で作り変えて状態把握や連携が図れるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	3ヶ月に1回のモニタリングは、期間(7日間)を設け計画内容のケア全部実施することで、ご本人の満足度を確認している。また、モニタリングの結果をご家族に説明し、ご要望を確認する機会を設けている。常に現状に即した介護計画であるよう心がけ実践している。	ケアプラン作成にあたり計画作成担当者は、入居者や家族の意向をもとに“今必要な内容”を掲げ立案している。1週間にわたるモニタリングでは、内容を詳細に評価し、家族に説明した後同意を得ている。プランの説明は、わかりにくいことから家族により理解してもらうために、日常生活を項目ごとに分け入居者が現在何がどこまで出来るか、その結果どういう状態になって何が必要かなどわかりやすい表現に徹し、説明している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づきや変化は個別記録に記載するようにして、情報の共有を行っている。また、日々のケアに反映できるように申し送りを活用し、継続したケアの実践ができるように実践している。状態の把握が行い易いように、排泄は青・水分は赤で色分けしケアに反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族に必要なニーズについては、柔軟に対応できるように、全職員が心がけ多方面から検討するようにしている。医療との連携も不可欠であるため、臨機応変に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	個々の状態に合わせ、ご本人の力を引き出す生活より安全を守る生活が主体になる方と、地域の資源を活用して生活する方で二分している。個々が豊かに暮らすことができる支援を今後も続けていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	個々の入居者の馴染みの主治医が診てくださっているため、安心した医療が受けられると感じている。また、往診や受診にも看護師が立ち合い適正な医療がつけられるよう、状態報告を行っている。より良い関係を継続出来るよう、今後も丁寧に対応する。	本人・家族の希望を確認し、これまでのかかりつけ医を往診や受診で継続することで安心した医療支援に繋げている。受診は家族やホームで対応しており、緊急時は管理者が中心に付き添い、現地で家族と待ち合わせている。入居者の健康状態については、面会時や電話などにより小まめに報告を行っており、今後も適切な医療支援に主治医と連携しながら取り組みたい意向である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ケア上で知り得た新たな情報は、記録に残すと共に看護師へ相談・報告を行い24時間体制で迅速に対応している。介護職員にも、医療について勉強する機会を設け、入居者に適切な時期に適切な医療が施されるように日頃より心がけている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された場合は、出来るだけお見舞いに行き、入院中の状態も把握できるように心がけている。このことにより、早期退院がスムーズにできるように職員全員で協力してゆきたい。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の決定は主治医が行うが、出来るだけ早い段階で話し合いが出来るようにしている。主治医の治療方針とカムさあの支援体制をご家族に説明し、ご納得いただけたら実践に移るようにしている。医療機関ごとに体制が異なるため、直接主治医と連携の方法等を話し合い、スムーズな支援ができるよう取り組んでいる。	開設時より本人・家族の思いを受け止め、主治医との連携によりホームで出来る終末期支援が行われている。支援に入る際は、医師の治療方針やホームの体制を家族に説明し、納得の上で実践されている。「最終の場面であるからこそ質の高いケアに取り組んでいきたい」と管理者が語るように、人生の先輩である入居者の最終を支えることに誇りと自信を持って支援が行われているホームである。	ホームでの看取りやギリギリまでの支援を行い、最終を医療機関で終えられた方々の遺影がリビングの一室に置かれている。また、絵を趣味とされていた方の作品は今でも壁に掲げているなど、ご縁のあった方を偲び、守っていただきたいとする職員の思いが伝わって来る。今後も揺るぎない「愛と奉仕の精神」により、入居者の一日一日を支援頂きたい。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応は研修会等で学ぶ機会を設けていると共にマニュアルを整備している。しかしながら、職員が緊急時となった場合の実践力に不安を抱いている。そのため、機会があれば、勉強する機会を設け、職員が不安なく対応できるように努めたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回に消防訓練を定例化している。地域の自治会や熊本市消防団第25分団と連携しながら実施している。また、防火意識を全職員で持ち、定期自己点検や、屋外の可燃ごみの放置などがないように放火対策にも注意している。昨年の豪雨災害を期に法人をあげて、防災マニュアルの見直しや非常用備品や食品の備蓄・寝具の整備を行っている。	年2回の消防訓練は自治会や熊本市消防団第25分団など地域の協力を得ながら実施されている。訓練後は運営推進会議を開催し、参加者の講評を受け次回に活かしている。役割分担表を含む訓練の計画書や内容は、写真や完了時間(避難・全職員連絡)など細やかな報告書となっている。また、これまで通用口に保管していたポータブルトイレの移動やテレビのコンセントが焼けていた事から定期的な自主点検の実施など、安全対策には早急に検討・改善している。災害時の備蓄として自家発電や食料・水・羽毛布団・ガスコロン口などが準備されている。	法人内での災害対策委員会への参加や日頃から安全管理への意識を全職員が高めていることが確認された。また、福島への職員派遣など震災復興へ取り組んでいる法人である。今後も、自然災害を含めて変わらぬ災害対策に尽力される事を期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の生きてこられた人生を理解し、尊敬を持って寄り添えるケアの実践に勤めている。プライバシーや言葉遣い・態度について定期的に研修会を設けているが、常に一定の質を保つことは難しい。職員は、介護する一方ではなく支えあう関係づくりができると入居者への尊厳が自然発生する。このような職員教育を継続させケアの実践に努めたい。また、職員間で日頃の言葉づかいを指摘し合える職場風土を継続できる努力をする。	ゆったりとした時間が流れるホームの日常は、「愛と奉仕の精神」の理念のもと、一人ひとりの入居者に寄り添った支援が飾らず、自然な形で進められている。その光景は訪れるものにも安らぎを与えている。起床から就寝まで、その人らしさの一つに身だしなみがあると考え、季節や時間に応じた衣類の選択、理美容やスキンケアに至るまで家族の協力も得ながら、いくつになっても生きることにより喜びを持てるようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	カムさあの理念であるため、ケアの基本にしている。本人の選択・希望を見落とさないよう、表情・言葉に耳を傾けるようにしている。職員が押し付けるのではなく、ご本人が実践できるような自立支援にむけたケアに努める。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	心身が安定した状況を保つために、できるだけ規則正しい生活が送れるように支援している。食事時間などは決まっているがそれ以外は出来るだけその方のペースで柔軟に対応するように心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節ごとにご家族にご協力いただき、おしゃれできるように支援している。また、入居者の理美容や入浴後のスキンケアにも気を配っている。その人らしさの一つに身だしなみがあると考えケアの実践を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は楽しみの時間であることを職員は理解している。個々の状態に合わせた役割を担っていただけるように声かけをしている。また、食事の盛り付けに参加していただけるよう食事を楽しむ支援に心がけている。	入居者にとって楽しい食事となるよう雰囲気や介助もゆとりを持って行っている。調理はホームと同建物内にある多機能型支援センターで作られているが、季節感や彩にも十分配慮されている。入居者は特に麺類を好まれることから種類を変えて(うどん・そば・スパゲッティなど)提供されている。入居者には味見や時には食材購入などできることで食への関わりを支援し、昼食は職員も同じものや持参した弁当と一緒に食べたり、介助後に休憩を兼ねて摂っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食生活は身体づくりの基本になるため、過度なカロリー摂取を避け、栄養のバランスを考慮した食事の提供を行っている。飲み物は、数種類用意し、一日1500ml摂取を目標に支援している。内容については記録に残し継続的支援ができるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、必ず個々の能力に合せた口腔ケアを実施し、口腔の清潔に努めている。自ら口腔ケアを出来ない方は、ガーゼを手に巻き口腔ケアをおこなっている。口腔内を肉眼で確認し、トラブルがあった場合は歯科につなげている。新たにペロタッチ運動を検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレで排泄ができるように誘導している。重度化に伴い1人で移乗させれない場合は、2名で対応するようにしている。トイレで排泄できることが、尊厳の保持に繋がると考え支援している。排泄パターンや習慣を熟知しながらケアを行う	トイレでの排泄が尊厳にも繋がることから、身体状況に応じて職員は2名での移乗など安全面にも配慮しながら取り組んでいる。また、清潔なトイレで自立や気持ちの良い排泄を支援している。個々に応じた排泄用品について検討を重ね、パットの大きさを変更する場合も、データをとって最良の物を使用するよう管理者は指導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	高齢になると運動量が減り便秘になりやすくなるそのことを職員は理解した上で、食物繊維を多く含んだ食事や乳製品・青汁・水分を多く摂取していただけるように努力している。それでも改善できない方は、定期的に下剤を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入居者の重度化に伴い、個々の希望日・時間に入浴することが難しく、職員が2名でリフトを活用しないと安全に入浴できない状況である。そのため、曜日を決めているがご本人の状況に合わせて入浴のタイミングを決めている。数種類の入浴剤を用い入浴を楽しんでいただける工夫をしている。	入居者の重度化に伴い、まずは安全な入浴の中で会話や好みの湯温、入浴剤の使用、スキンケアも一連の流れに加え、楽しい入浴となるよう努めている。また、一人ひとりの入浴支援方法を検討し、画一でない取り組みが実践されている。浴室は清潔に管理し、入居者に気持ちよく入ってもらえるようにしている。	浴室の窓棚に置かれた物品を収納することで、更に明るい窓を見ながらゆっくりと入浴が楽しめると思われる。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	重度化に伴い、日中に休息を入れないと食事が入らない方がいらっしゃるため個々の状態に合わせた休息の取り方を実践しているが、昼夜逆転にならない程度の時間とし疲労回復に努めている。寝具を天日干し、できるだけ快適な睡眠になるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が薬の内容を把握するため、個々の薬事情報を各個人の薬に貼り、どのような薬を飲まれているか理解できる仕組みをつくっている。また、薬は3回確認するようにしており誤薬のないよう職員全員で取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	重度化に伴い、全員で外出することは数年前より行っていないが、個々の性格を理解し、役割や楽しみごとの支援に変更している。外出は、個々で対応している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	重度に伴い、ご自分から外出の希望をされることがなくなってきた。しかしながら、季節や体調を考慮し外出できるよう行事の計画を行っている。ご家族の協力や地域の皆様の協力を得ながら今後も計画したい。	「個人を大切に！」「グルーピングを大切に！」と考えて、外出支援に取り組んでいる。重度化の現状であるが今年度は車3台を使用し、入居者の作品が掲げられている温泉施設に出かけている。ショッピングモールでの外食では、ちゃんぽんが好評で楽しい外出となったことが聞き取りからも確認された。	今後も家族や地域の協力を得ながら入居者の外出支援に努めていきたいとしている。重度化により希望を出される方も少ないようであるが、敷地内には野菜や果樹の成長、地域を眺めるには最高の立地であり、日々の散歩など短かな外出支援を継続していただきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理は個々の能力とご家族との話し合いで支援している。ご家族の協力が不可欠で、外出した際は、お金が使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	職員は、ご家族や大切な方に対する入居者の気持ちを理解した上で、電話や手紙でのやりとりが出来る支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地の良い空間づくりを心掛けており、室温・湿度にも気を配っている。リビングには音楽をかけ心地よい環境にしている。また、玄関やリビングには季節のお花を活け季節感を感じれるようにしている。入居者の衣類は、季節にあった服装を選び心地よく過ごしていただける努力をしている。	ホーム内は入居者の身体状況に応じながら、家具の配置や畳スペースをフローリングに改修している。中庭を眺めながら入居者はテレビではなく、職員や入居者同士の会話、面会した家族との時間など穏やかな時を過ごしている。何よりも職員自身が環境である事を心に留め、カムさあの意味する『ようこそいらっしやい』の思いを持って入居者の環境を整えている。また、管理者は「物に住所を決めましょう！」と、整頓の必要性を指導している。廊下には外出や日常生活の写真の掲示、手作りの置物が季節を表していた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングには各種ソファや椅子を用意している。入居者が思い思いに過ごすことのできる居場所づくりを行っている。また、1Fテラスにもテーブル・椅子等を置き、どの空間でもゆっくり過ごせるよう工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人の馴染みの家具を持ち込んでもらい、落ち着ける居室づくりに取り組んでいる。物の配置はご家族と相談した上で決めている。個人のプライバシーが保たれる居室になるよう今後も努力してゆきたい。	入居時に馴染みの品々の持ち込みを依頼しているが、その後の生活ぶりや心身の状況から家族とも相談しながら居室空間を作っている。ホームは職員の細やかな日々の関わりを大切にしており、些細なことでも気づいた内容を共有し、居室作りにも繋げている。特に入居生活が長くなされた方には、本人の望む生活を居室でもできるよう、家族との連携に努めている。	家族や思い出の写真、使い慣れた家具や好みの衣類など、どの部屋もその方のこれまでや家族の思いが伝わってきた。今後も本人にとって居心地のよい居室作りを継続いただきたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々の力を理解し、わかる工夫やできる工夫をしている。わかる工夫として、日めくりカレンダーやタンスへの表記の実施。できる工夫として、手すりを整備しバリアフリーにすることで建物内を自由に過ごすことができるように工夫している。		